

(3) ②様式第3号-2 (報告書)

※文字のフォント、大きさは Meiryo UI / 12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。

※写真は、進行プログラムに沿って適宜、右ページに簡単な説明文を添えて貼り付けてください。

※必ず A3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

NITS・教職大学院・教 育委員会等 コラボ研修プログラム 支援事業報告書	実施機関名・連携機関名 ※実施機関名、及び連携機関名（ある場合のみ）を記載してください。 茨城県教育研修センター 事業名：：【NITS・茨城県教育研修センターコラボ研修】 茨城県教育研修センター 教育の情報化に関する研究発表会 ～「豊かな気付きが醸成される学び」につながる研究発表会の実現を目指して～ 研修等名：【NITS・茨城県教育研修センターコラボ研修】 茨城県教育研修センター 教育の情報化に関する研究発表会 ～「豊かな気付きが醸成される学び」につながる研究発表会の実現を目指して～ 開催日時：令和 6 年 8 月 6 日 9 時 30 分～16 時 00 分 開催場所：茨城県教育研修センター（茨城県笠間市平町 1410） 参加人数（総数）と参加者の属性：(244 人) 教職員等 217 人、学識経験者 1 人、企業講師 12 名、実践 発表者 8 人、教育研修センター職員 6 人
--	--

目的：当センターでは、協働的な学びの質を高めるための ICT 活用の在り方について教育研究を行い、令和 6 年 3 月の報告書公表以来、関係各所から良好な評価を得ている。研究にあたっては、小・中・高・特の各学校種から 2 名ずつの教諭に協力員を委嘱し授業の実践を行ったが、その詳細については報告書に十分記載しなかったこともあり、質問が寄せられることもあった。これは、授業実践への関心の高さを示すとともに、更なる情報発信の必要性を示唆している。そこで今回、授業実践の詳細や具体的に焦点を絞った発表の機会を設け、広く公表することを意図して本事業を企画した。

一方、一般的に研究発表会は、発表に加えて有識者の指導助言やシンポジウムなどを聞くことが中心（いわゆる伝達型）で、参加者は受動的な立場に置かれがちである。そのため、知識が得られても自らの実践へと発展させていくことが難しい場合が多い。

そこで本事業は、発表を聞くことに加え、多彩なアクティビティを組み合わせることにより、実践への発展を見据えた「豊かな気付きが醸成される学び」につながる研究発表会の実現を目的として実施した。

内容：

1 実践発表

研究協力員 8 名それぞれが実践についての発表を行った。主な内容は次の通りである。

- 小学校第 6 学年総合的な学習の時間において、クラウド上に保存してある学習カードを活用し、前時の振り返りから学習目標を設定する活動、思考ツールを用いて調べた情報から新たな課題や解決策を見いだす活動
- 小学校第 3 学年図画工作科において、第 5 学年の児童等と交流する時間の設定、鑑賞プログラム「ハロー！ミュージアム」の実施
- 中学校第 9 学年社会科において、3 段階に構造化し、話し合いの視点を明確にしたデジタル思考ツールの活用、道徳と関連させた教科等横断的な活動
- 中学校第 3 学年外国語科において、市の魅力を発信する 30 秒の CM を制作する活動、他学年の生徒や保護者、A L T から CM についてアドバイスや感想をもらう活動
- 高等学校第 2 学年国語科（古典探究）において、シンキングツールを用いたグループ考察、クラウドを活用した他クラスとの情報共有
- 高等学校第 2 学年理科（物理基礎）において、Web アプリケーションの活用、第 3 学年の生徒との交流活動
- 特別支援学校小学部第 3 学年生活単元学習において、デジタルホワイトボードを用いた表現活動、パズルゲームでの他者との関わり
- 特別支援学校中学部第 1 学年総合的な学習の時間において、デジタルホワイトボードによる意見の可視化、三つの教育課程を混合した交流活動
- 研究の詳細は次の URL から閲覧可能

<https://www.center.ibk.ed.jp/wysiwyg/file/download/1/3460>

2 実践発表に基づく実習

- 小学校部会では、図画工作科「ようこそ小さな美術館」と題し、対話型鑑賞を通して見つけた作品のよさや面白さを紹介する「小さな美術館」をつかった。様々な視点や表現方法を基に自分のイメージをもって、鑑賞活

動に取り組むことができ、感じたことや思ったことを伝え合うことで、自分なりの作品の見方や感じ方を深められることを学んだ。

- 中学校部会では、クレイジー 6 とデザインツール Canva に関する実践を行った。短期間で効率よく多くのアイデアを生み出す手法や CM 制作体験を通して他者と協働して課題に取り組む学びについて体験した。
- 高等学校部会では、物理基礎「発音体の振動と共振・共鳴」における気柱の振動と音階の実験を行った。Web アプリの活用やデータの自動分析、思考ツールの活用などについて学んだ。
- 特別支援学校部会では、新たな考えを創造するための効果的な ICT 活用について実習を行った。カメラや写真マークアップを活用した思考の表現や Canva の共有機能を活用した思考の可視化について学んだ。
- 3 スキルアップセミナーでは画像やテキスト生成 AI を操作しながら、生成 AI を活用した校務 DX や生成 AI の現在と教育に与える影響、AI ネイティブな子供たちの可能性を伸ばす教育について学んだ。
- 4 講義・講評では東北学院大学 稲垣忠 教授より、研究の総括や受講者の学びの集約・価値づけ、そして情報活用能力への対応という課題を提示していただいた。

成果： 来所者の事後アンケート結果は、「新たな知識やスキルが得られたり、新たな気づきがあったりした」が 88.1%、「ICT 活用に関する捉え方や考え方で変わった部分があった」が 62.4%、「本日の内容に関して、学習指導や校務での具体の実践について考える瞬間があった」が 61.4%であった。また、複数の参加者からは、これまでの学力観に関する考察やその更新への意欲の表明がなされたことから、期待される成果として挙げた、「ICT 活用に関する知識と技術の習得」や「自らの実践の特徴や考えの枠組みへの気づき」は多くの参加者に実現できたものと思われる。

本会にて得られた様々な気づきやヒント、学びにより、多くの参加者から引き続きの研修の受講や研究発表会参加への強い意向や、実践への意欲や手ごたえが表明されたことから、テーマにも掲げた「新たな気づきが醸成される学び」につながる機会になったものと考えている。

「NITS からの提案（第一次）」との関連における研修担当者としての気づき

提案の趣旨にもある通り、学び手たる教職員を主語とした研修への転換を実現させるため、いわゆる伝達型のみの発表会からの脱却を目指し、一つのスタイルとして多様なアクティビティを盛り込んだ形態を創造した。参加者からは、「実践発表だけでなく、実習やスキルアップセミナーをやっていたことがありがたかったです。」「とても実践的で、今後の指導や校務に生きる研修を受けることができました。」「様々な活動がバランスよくあり、終始ワクワクしながら参加できました。」などの前向きな意見が多数寄せられたことから、提案に沿った事業を実現できたものと考えている。また、多くの参加者が生き生きと活動する姿が見られたことから、教職員を主語とした研修は強く求められており、これまで以上にその実現を意図した研修講座構築への使命を強く感じた。

アイデアや工夫したこと： ※実際の様子がより分かるよう、必要に応じて写真や図を用いて説明してください。

個別最適な学び、協働的な学びの実現及びそれを通じた主体的・対話的で深い学びの機会が意図的に生まれるよう、「学びの相似形」となることを意識しながら、内容はもとより研修形態にも工夫を凝らした。



学識経験者、企業や大学生を講師やメンターとして迎えることにより、参加者が学校以外の多様な他者とつながり、普段の教育活動では得難い経験や知見を獲得することによって、より豊かな学びとなるよう工夫した。

